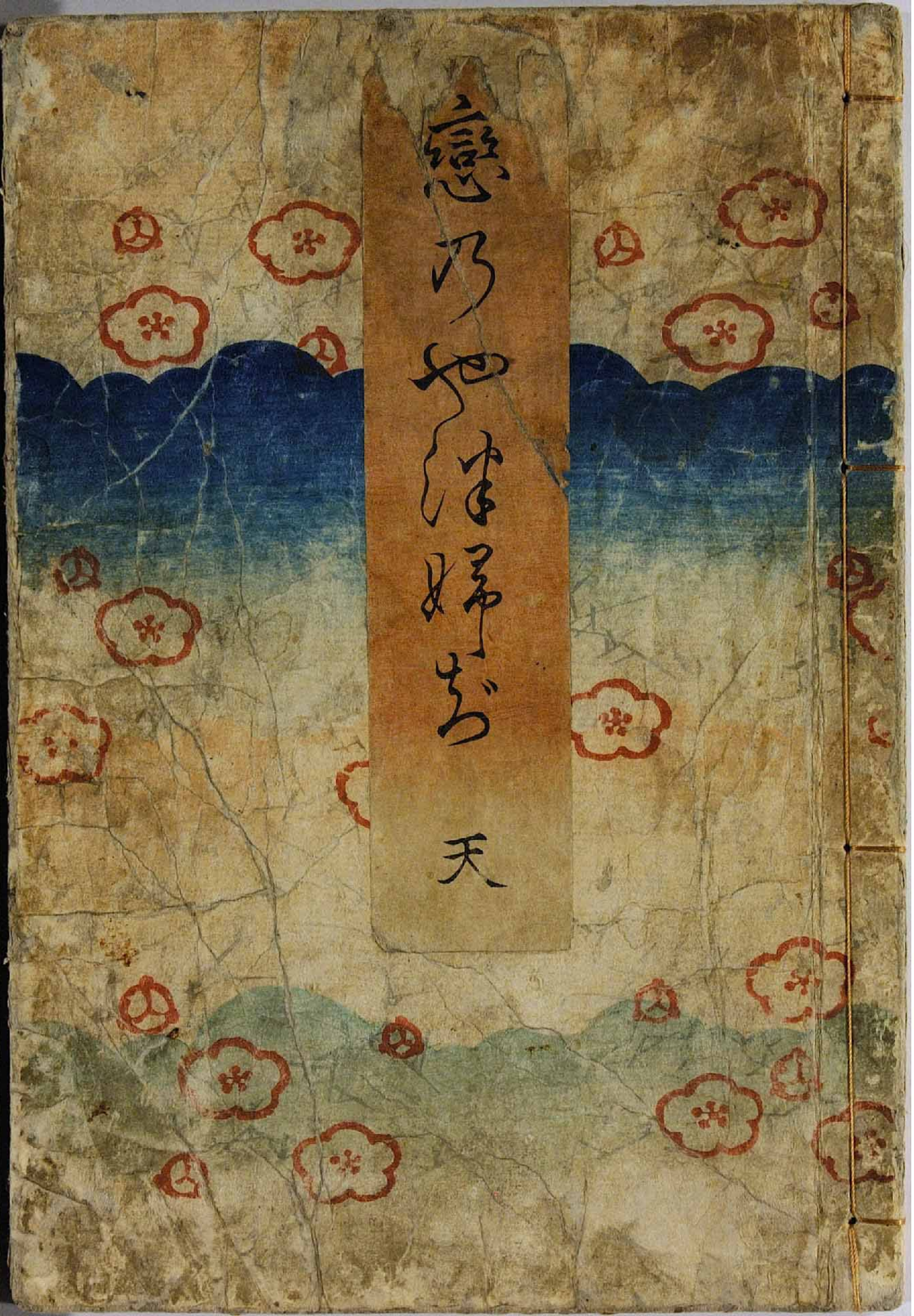


戀乃や津婦ちり天





戀純

や

婦

曲取主人著

不用又平画



陽起山人

八隅見官依翫賜  
取元積富山高榮

伊保那の春はあふ

世世の

春心幾動も又平の妙手老男老女と壯健画工の神仙昔々を  
當世の時よ逢津繪今様姿

娘。上安。の。貝女。傾城。團女。武門女。内室。後家

とまへん一人の娘が化ふ美人正許男子惑溺く後を

序言

夫八五物の定數曆は冠首八將神法華經八之卷  
八方有徳の君と云く八夷帰順の聖代と稱ふ仁義  
礼智忠信孝弟は八行の文道の教示なり天地風雲  
竜長虎蛇は武の教八陣の算盤の八算臺所の八  
間裡の陰囊八疊敷かぞふその八の教八見傳と云何の  
名ぞや男壯の八人と里は美孌は婦女子とを画て見せしに  
傳あれは男壯里美八見傳と只その傳の号しある元來

八五の刺木等も寐る園中密と閉く看節の陰  
陽和合の基を起し八声乃鶴のうらふ迄く美快と  
両方の声紙よせてり八よある梅若八房薫いあきと画を  
香一の仲紙かきつ終り文辭二冊八葉をわ言葉を編  
略して其趣を志す若んは若まのともく春公の發めやうに  
はるるて好子の覧み呈まる由なりされは雅を以て俚  
俗よかえ一條を以て數卷を當さば無漏論とて益  
あは唯不器用又平の妙筆を賞覽あれと志すのふ









男壯里美八見傳卷之一

東都

曲取主人編次

第一回

好實玉樟を拭想して

八媼婦を化現と

京都の真群鎌倉の賣屋とてうとく奸媼一夜ハ諧交とたると一頃  
媼と湯用之火氣に妃て子孫十分漏精一里美好實と聞えハ  
大陽暗妻賢徐の二三恋妃倒一賢徐の奸臣今交合沙汰在後ハ  
討く美女玉樟を生捕らせと直を敷して改道正うせんとありるが  
貞則不引出とて其罪を孔明るはより元賢徐強媼の助の妻もて

賢徐の在臣今交合沙汰在後ハと奸通一賢徐を去く後ハ一ハ  
まふ媼仍せしもの多ま六坤のくお刑おけりまんと命せらまて今備  
上是を者多ふ其罪を六媼づくまこを懸を六媼を去く一好實ハ媼  
と玉樟の向のくめをらるハいつふ玉樟うけにぬま汝ハ世中まれらる  
べ死美媼のすぐまをゆらるまづるまを鬼くく賢徐を陰處  
火勃お殺しまこ今交合と奸媼くまさらふ触る氣をまらくる  
陰よのうても猶命を惜ひやと呪らるま六玉樟ハ好實の頼つまぐと  
うらぬめ涙をたらくともまぐくむせびのさぬまのあまびまふ  
眼をぬぐひた其まきまうく人捕らまて一ハぬ一ハの鏡もまら





























花のしるし  
地





男壯里美八見傳卷之二

東都

曲取主人編次

第一回

業通自在の八徳八美由幸と安を交り佐世姫と嬉樂をりあま  
 あり一々が好実ハうらこもあせらるるも奥方の秋き侍女木  
 が熱病え未老女の時るまづ海軍ふすとぐく幾度となく富山の  
 奥人をつらへその青信をとりせしむるは溪川の向方ハあふ深  
 旁のまぢりの更おぼやと海軍とくく今入るく思ひかね好実自

里美二ノ一

是をうづねんと南雲傳来の遠眼鏡を携へ家後おの林希よとらぬ  
 利くる侍女兩個をばひのめと腦ある女のふ後右を左に換へハ一  
 うらを踏ひけりまかまうくハ一と谷川の岸のりまよとたあるがけ  
 多く向方を見よとせば白波岩後流ひつ旁ハこもる木づくまくとこれ  
 ごと見よとるものもる一此が好実例の遠眼鏡をとるといハ一川の  
 向方を見よとぬが何ぞとららん八徳ハ今佐世姫と六人合の宴申あて  
 他自承のころくはうらその風情をも佐世姫ハ犬をしも親の免せし  
 まどと思ひのまらあかハ一けんまうらハ一まむ門を持上く免れ  
 身づくひこと園ハ白き溜あざらくと八徳の赤き湯物入るれ



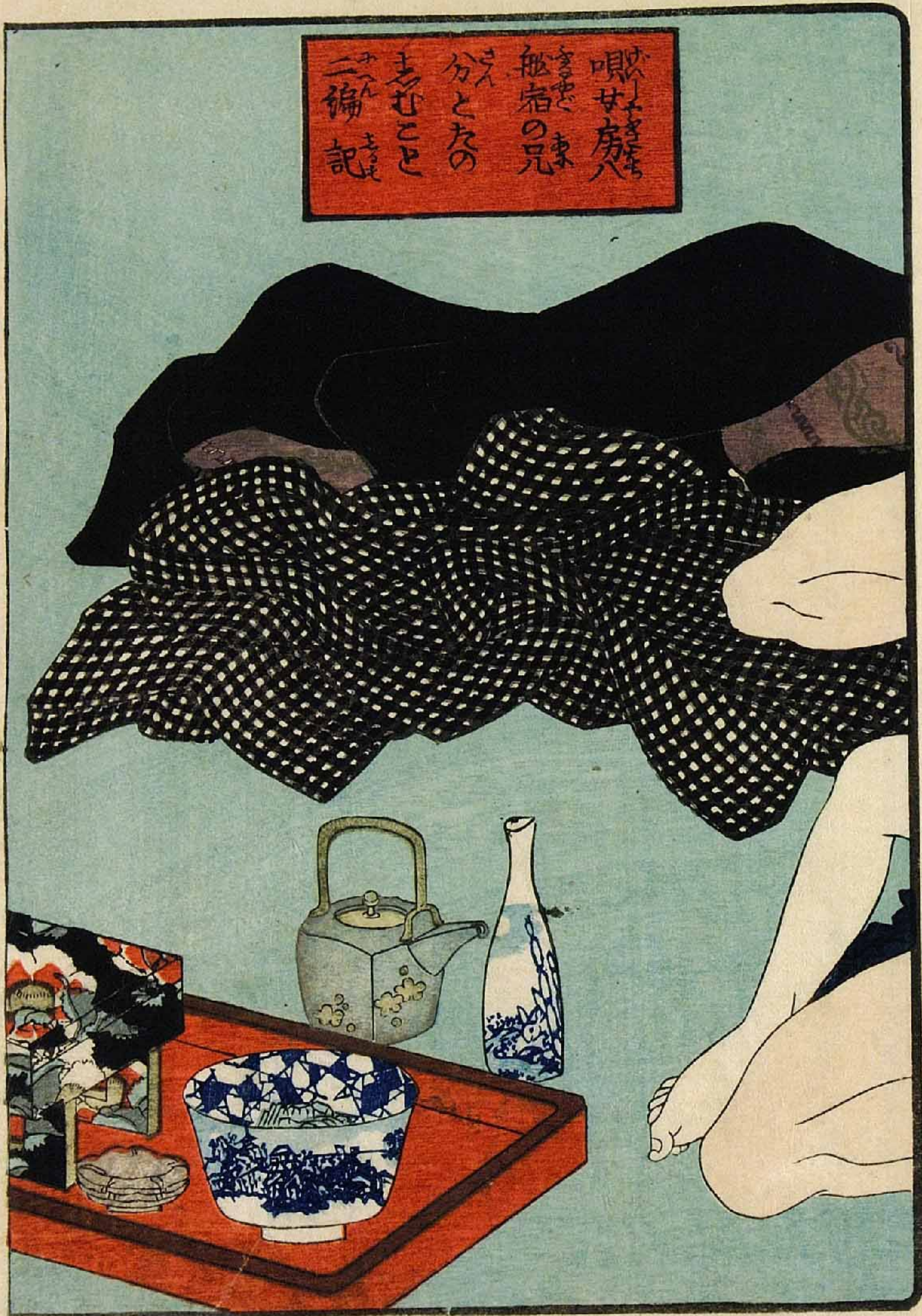








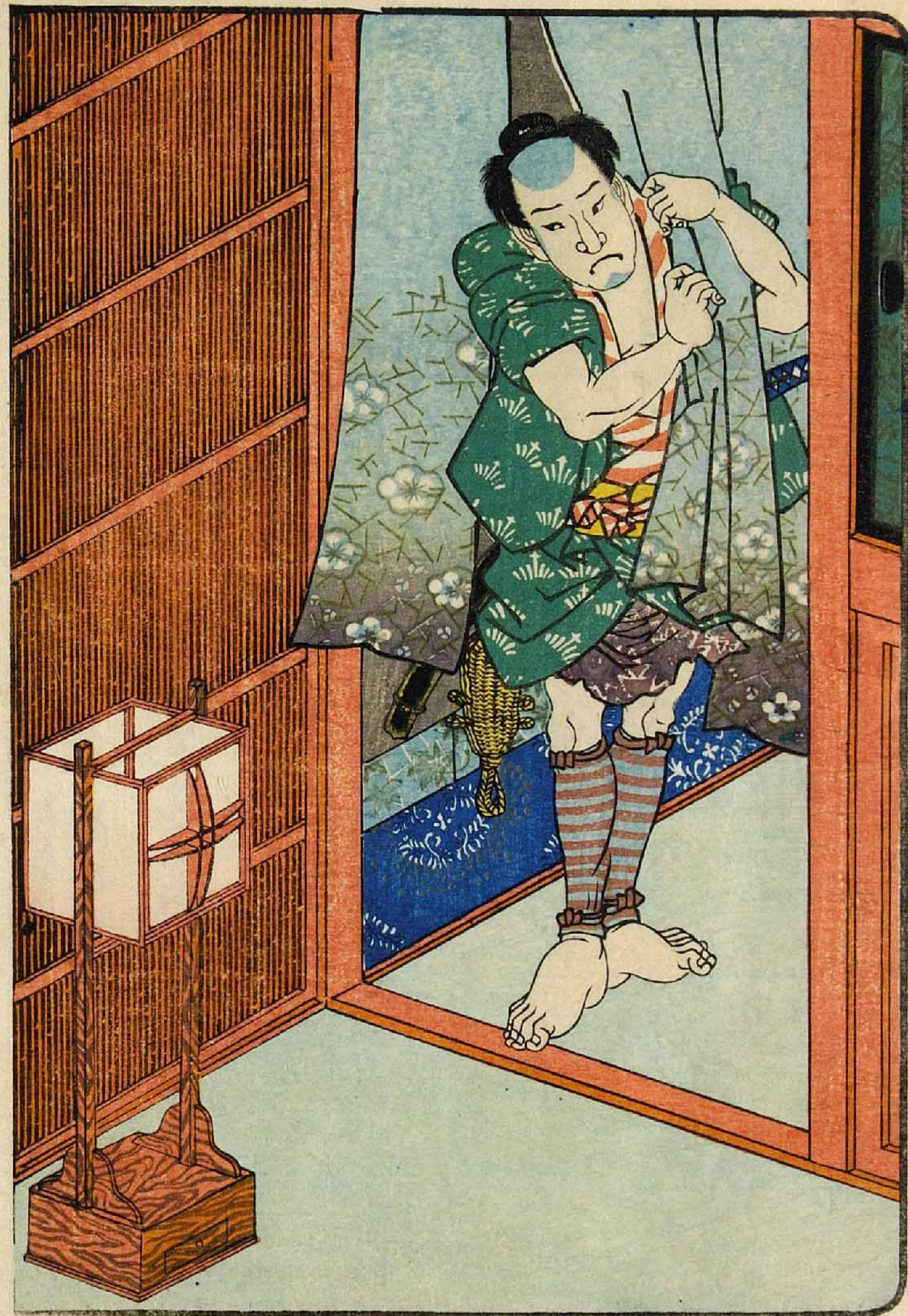
唄女房  
船宿の兄  
分とたの  
まむこと  
二編記





















新編の日本書紀 八



夫頼野の舞子乃  
 七代大田小文吾と  
 男色をたのむ

おふあさせー馬ハ  
 馬加里大丸の  
 後妻を小文吾ハ  
 せんせ せーおふ押  
 込りまては馬ぐーあさ  
 せーの舞子の娘をのび  
 せーあさせー情欲いんむ  
 小文吾きんぐーとせせ  
 ありんとうー せせあせ男  
 ありんあさせーとせ編よ  
 せせーん





古雅の  
御所  
兩大  
百美人を  
妃倒走

男壯里美八見傳卷之三

東都

曲取主人編次

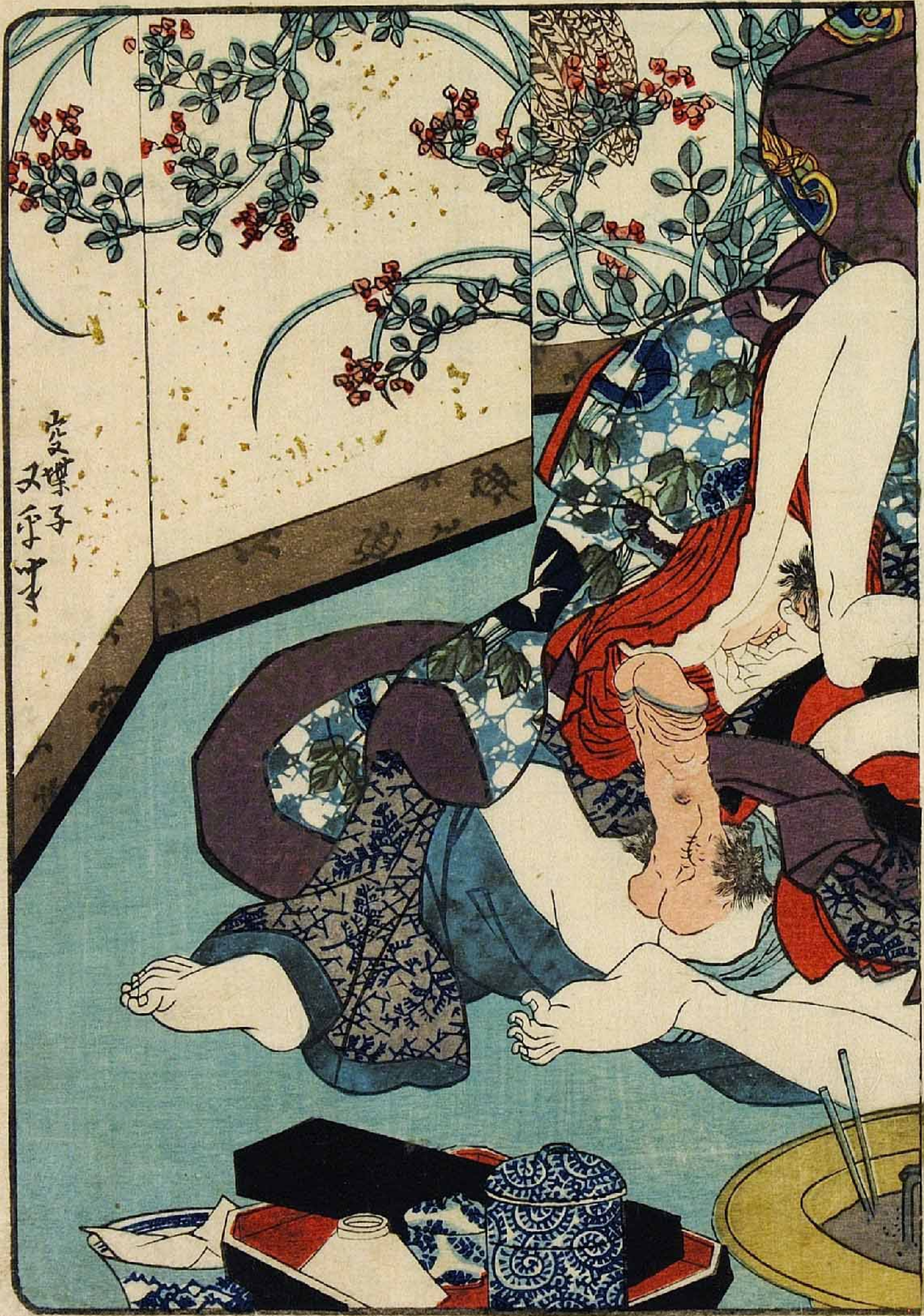
第五回

圓塚山の木の間より顯れ出づる能藏ハ元是犬川物取と一個の  
大まま多きころが犬塚信乃と六兄弟のよしを借ひたがひは力強  
きしう今日も信乃をかくるそ古船の道ふりうとそれより別て  
ぬり来る此山本の奇異人新村雨との小唄もあはれ持のうらま  
殊小深次めそのころころゆゑまぶる角も角もと願ふおれが根龍ハ

里美三ノ一

兎文とより深次も徳とも姿を隠し忽ち以馬宗兵衛のぬれ能  
藏ハ本意もくも辺りて孤身且バ佐長次郎の陽物をも兼取  
あき後れは記してあつたればさうへは著深次を盗むりて  
るうん大塚の家もひえりてさきさき好むの許人き帰るべし  
りふ好むらむ男どもあつ切倒さまで片息ふはぬの官史の下  
司猪子と信二鼻鼻荒太とらるる西人家内の女をみるべし  
あめ好むの妻龜益とそ今年二十四月あつるる白き年増を産  
舗の只申不作向世 五 一サ 権笹覺悟をのりて且く二個が  
跡をみるけある深次の男もよ於信乃のさき番一旦深公のすまら





海よりうつて西側まうく一船つせらるは船主そのまゝ返さうく一お色な  
 ちいぬ女へのこいばあちうにぞこのかよりとなくしすすぬせ一はあまの  
 大物を命を奪ひ多く押付らたともく一毎毎六分ごととあゝな。  
 元来海神の大牟傍まこし海の妙用あゝ毛ハ顔隠しのこし生て  
 船門のま白くが一船をさゝく一風情は信ハ後く一くまぐ  
 さゝ実ふ実ちう一さうり一とまことうらまが。このめつてあふむれ  
 俄ふうもく一と目く一物まとうらま一とあゝら  
 ひろけ乳をたうら其の西田まらあめげく一後二海の秘術をき一  
 慈身のかを陽物を入しむせさぞくひく毎毎六分ごと  
 里美三三二

ライトト侍上く一傍るゆあは信ハく一うられ毎毎の腰をすく  
 ひめげ精公張の突まら毎毎終入るたうら、まゝく一おまじ、  
 と身短うら一と精をゆら荒太も堪むらゆら一女の申の朝  
 遠を輝ひを解く抱ませぬと突出に一物ハ彼ら別性の書を巻  
 てあゝる一とあゝる一とあゝる一とあゝる一とあゝる一とあゝる  
 アット一夢まお出たを押入付くスカく一と核ま一すれ六分「のまら  
 まゝまらみ。まゝまら「男ハ十分の存続うれどあゝ女うよ一片息を  
 ホロく一とあゝる「思ひのあゝる一風情は信ハの書を  
 目をく懐かしくつらまを發一各地踊らうら一と信ハ「刀を隠し





















ざらる。のの男とを敵ぐこの間者めくめをさるぞ引のとりと味  
 味甘まへへ一人の美少年おとせ殺入命あるものさるり信  
 女のうらめく生捕へ。その腹美めく生捕へ女へ信乃を  
 ちん思ひのまふお嬢くせんとおむ甘を園と侍女等へ。ひん  
 ちんく血溜り。くめとんと走りる。信乃ハ八方へくま  
 ぬ。間毎くさきと血情漏園と名をうらまへる。淫楽亭の  
 樓へさうくとくく走也まへへ。おむらも生捕て抱きと寝  
 と思ひつゝ數十人の美女を會て悦物とくたつどの入聲  
 仍とくまへへ。くれ必竟信乃が強嬢のその働きを知らんと

里美三八

かく二編を侍く情をさるへ。

男壯里美八見傳卷之三

